世界の外国為替市場の実態

中央銀行の中央銀行と呼ばれる BIS(国際決済銀行)が 3 年に一度、世界の外国為替市場の調査を行っている。調査年の 4 月中の 1 日平均取引量のデータを取って実態を探るものだ。2025 年は調査年に当たり、速報値が公表された。そこから市場を特徴づけるいくつかのポイントを挙げる。

1） 世界の外国為替市場での 1 日の取引量は 9.6 兆ドルに増加した。前回調査(2022 年)より 28%アップした。外為取引量は 2001 年比で 6.7 倍になった。その後 2 回ほど減少した年もあったが、基調は増加トレンドが続いている。

2） 特に今年は調査時期にトランプ大統領の関税宣言、リバレーションデーが当たり、為替取引が急増した。具体的にはドル売りが活発化した。それはドルのヘッジ取引と言われた。ドルの債権、資産を持つ人が将来のドル下落による価値の減少を防ぐ取引だ。例えば輸出企業が先物でドルを売るような取引だ。今回の場合は主に米国債などのドル債券の保有者が先物のドル売りを実行したと言われる。

この点はアウトライトフォワード(先物)の取引量のデータを見るとわかる。アウトライトフォワードの取引量は世界最大の市場のロンドンで前回調査より 102%増加、ニューヨークで 51%の増加、シンガポールでも 42%増加した。アウトライトフォワードは普通多くはないが今回は特別だ。

3） 取引量を国、市場別に見ると英国ロンドンが最多で全体の４０％、次が米国ニューヨークの２０％、この順位は調査開始以降変わらない指定席だ。3 位がシンガポールで１０％、4 位が香港６％、5 位に東京３％が来る。東京はかってロンドン、ニューヨークと共に世界三大市場の一つと言われたが、現在その面影はない。凋落はさみしいがそれが実態だ。それでも 2010 年までは 3 位を維持していた。13 年にシンガポールに抜かれ 4 位に、16 年には香港に抜かれ 5 位に落ちた。その後も差が広がるばかりだ。東京も取引量の基調は増加しているが、その他の市場の増加のスピードが上回る。上位 4 市場で全体の 75%を占める。

4）　為替取引での通貨別の割合だが、ドルが 89%と圧倒的だ。これまでも概ね 8-9 割を占めていた。ユーロは 29%、前回までは 30%台が多かった。円は 17%、前回と同じだが低下傾向にある。次にポンドが１０%で前回より低下した。5 番目の人民元は９%で前回７%から増加した。円、ポンドに次いで 5 番目の取引量だ。為替取引では 1 取引に 2 つの通貨が関係するので全体では 200%になる。ドルが 9 割と言うことはほとんどの取引が対ドル取引と言うことだ。ユーロ円、ユーロポンドなどのクロス取引のシェアは小さく、為替レートへの影響も小さい。対ドルレートがクロスのレートを規定すると言える。

5）　通貨ペアについてはスポット(直物)ではユーロドルが 22%、ドル円が 18%、ドル人民元が 10%、ポンドドルが 7%となった。ユーロドル、ドル円の 1, 2 位は変わらないが、今回 3 番目にポンドドルを抜いてドル人民元が入ったことは驚きだ。